名刺屋
手紙
の
比
袋
十編
柳亭燕彦翁門人
仙果作
門人国芳画
錦林堂梓

七編上
柳亭種彦著
歌川国貞画
吉田屋版

足利絹手業芳茅舎編 巻之七 作者

笠亭仙果畫 一陽齋豊國 画

履端蔵版 市ヶ谷亭

錦林堂蔵版

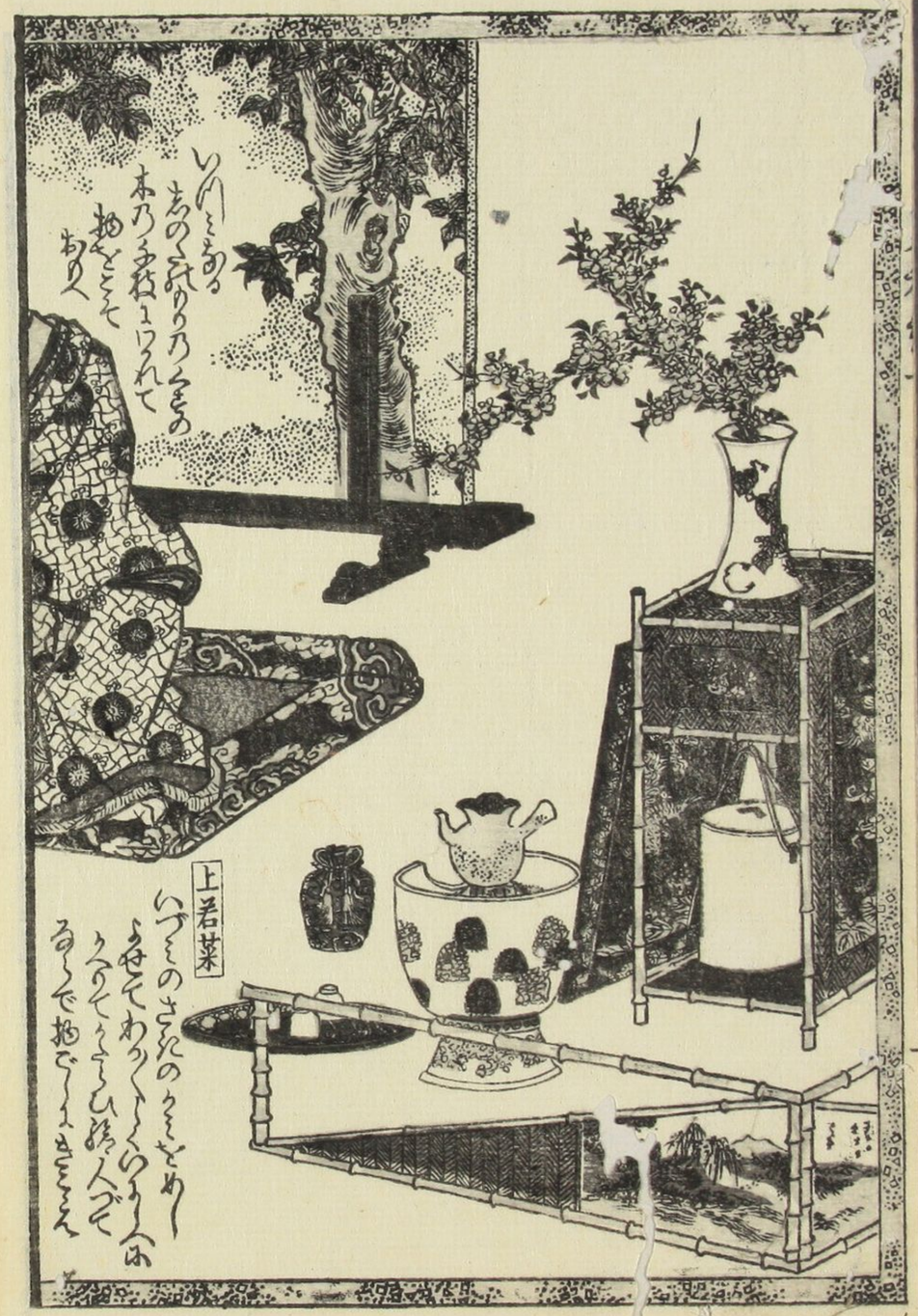
金閣寺林泉

畧圖

相替らぬ支と目出度支の嫌ひとゝいふけれども祝の欲よろ述懐ゝ面白く二切ふ泣てこそ義大夫も身ゝ為むるれ善人計で筋ゝたぎ折角甜い醴ゝ生姜をとられて雅ゝ〻ゝ紫史ゝ古来の物語の中ゝゝとも穏也人を殺さぎ金ゝ逼らぎ惨いめをとゝる支ゝ〻ゝそれで無量のおりゝゝのあるのゝゝとく佳作ゝれど卑俗ゝ訳ゝて愚文ゝ綴まゝべ濃ゝゝゝゝの色ゝ抜地合のあゝゝ手染の不器用鳶色ゝさゝ似もつぎ先師も既ゝ工夫を凝ゝ本文ゝ相替ゝる丸心の曲者寶の紛失小鳥ゝど目を覚さ〻ぎ朝顔ゝ花ゝたゝ結ゝ目浮せ〻紫船ゝぎゝきの茶利場もゝゝ髭男の目ゝ灰ゝゝて一度ゝ白黒くせゝも又眠素ゝ〻春の雨梅枝の薫物合藤末葉のゝゝと若菜ゝゝとゝ和る処ゝ美味とゝ計ゝふ者ゝ煮ゝ〻着ゝゝゝぎゝゝて化ゝゝも

八編

泉の前司を苦ゝ〻葛葉ゝど化ゝゝも入事ゝゝて立ゝゝぬ我拙ゝゝゝゝ


上若菜

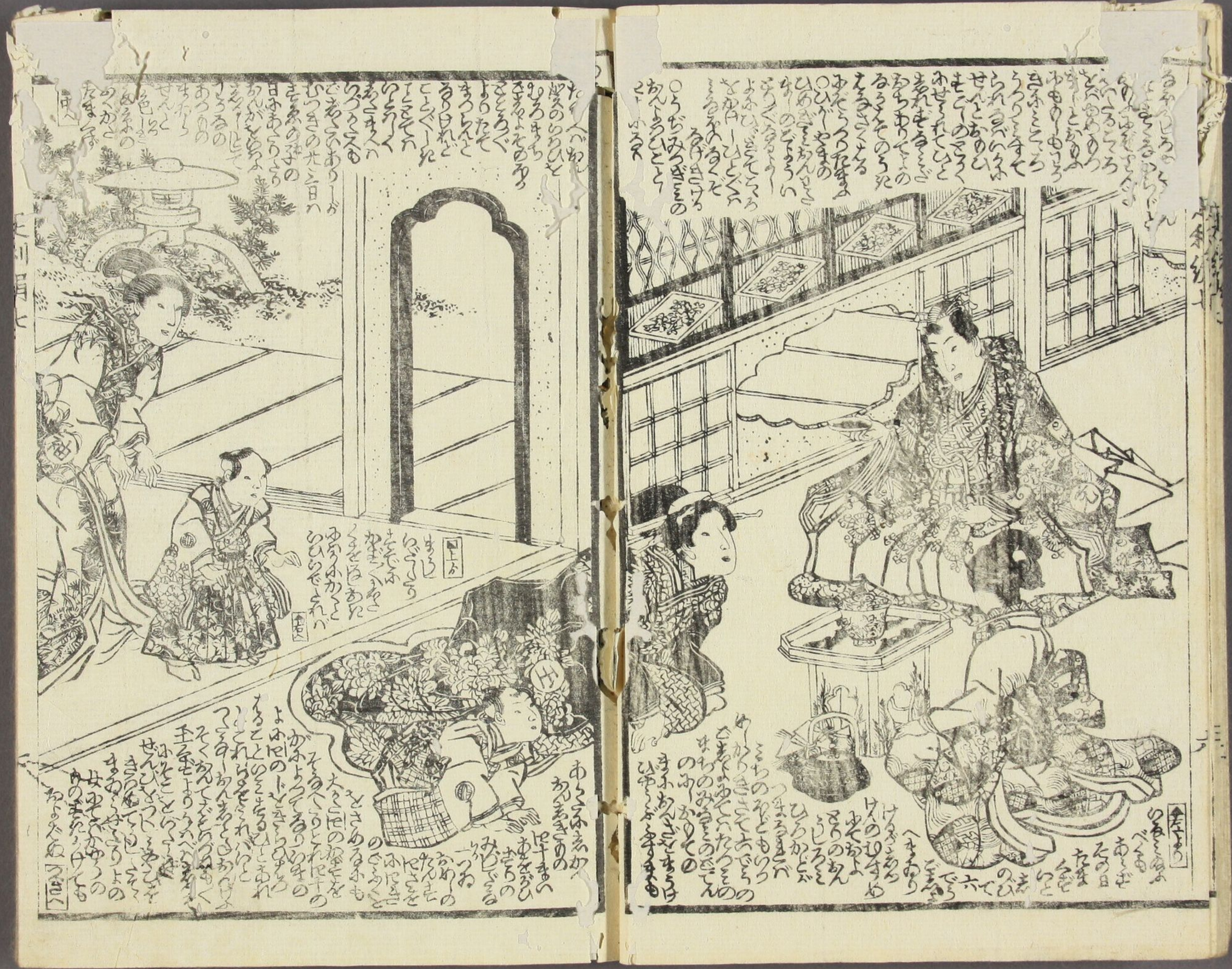
石堂馬之丞妻
桂樹ゞ侍女
葛葉

○ことし　あらまの
るうえのうりけり
うぢ　ろ　ろ　ぎ　ま　い
石堂　ぶ　う　仁　本　が
とれ　ま　る　ど　と
ゆ　ま　れ
ま　と　ー
コ　す
ま　の
ど　番
え　ん
あ　り
き

○らまいふ　ふ　ひ　の　ち　ま　た　ん　ふ　ひ　と　ー　ま　く
よ　ろ　あ　ひ　ど　と　ゆ　て　と　の　ま　ろ　も　ま　ま　と　と
あ　ま　り　ま　ー　ど　と　の　ま　ら　ま　も　の　の　ま　ん　と　え
け　う　ふ　ま　ら　め　た　の　た　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
う　ぢ　る　ま　ふ　ま　る　ま　せ　て　あ　き　ふ　四　き　の
ま　ま　と　か　せ　ま　ま　く　よ　ま　ー　せ
た　ま　ひ　と　れ　と　た　の　ゆ　そ　ま　ま　ゆ　ら
せ　よ　と　ま　へ　の　日　ま　ら　め　の　せ　ら　れ　が

そのよいたづひふそ　ふ　ま　ー　ー　ー

つぎき
左より
このところの名どきハへんれいくれし



古画入隨筆
文箱の紐
二冊
柳亭先生
遺案
仙果
補級
右未夏
賣出申し

一陽齋豊國画
笠亭仙果作


嘉永五年壬子新刊

足利絹手染紫
笠亭仙果作
一陽齋豊國画

○十編より十四編まで當子春發兌若菜の上第十二編より
全くをろく十三編より同下いくみ、そうあひ姫の恋物語の
えんえん人情の極致をかきあらはす　右ハ彩色摺大判紙大書出れり

極彩色　ひのかぎぬ染上り大雙六　袋入一枚物

これもむかしよりゆうれい芳藤画まて御逸伝は評判なる
やうにいとあたらしきもの希よ

山東京伝奇談　娚娜櫻　種吉作　芳房画

右初ハ西宋堂行延行仕い尚来
ちくさ妻出ーゆい

東都神田鍛冶町二丁目
太田屋佐吉謹白

七編下

# 千代の春

仙果作

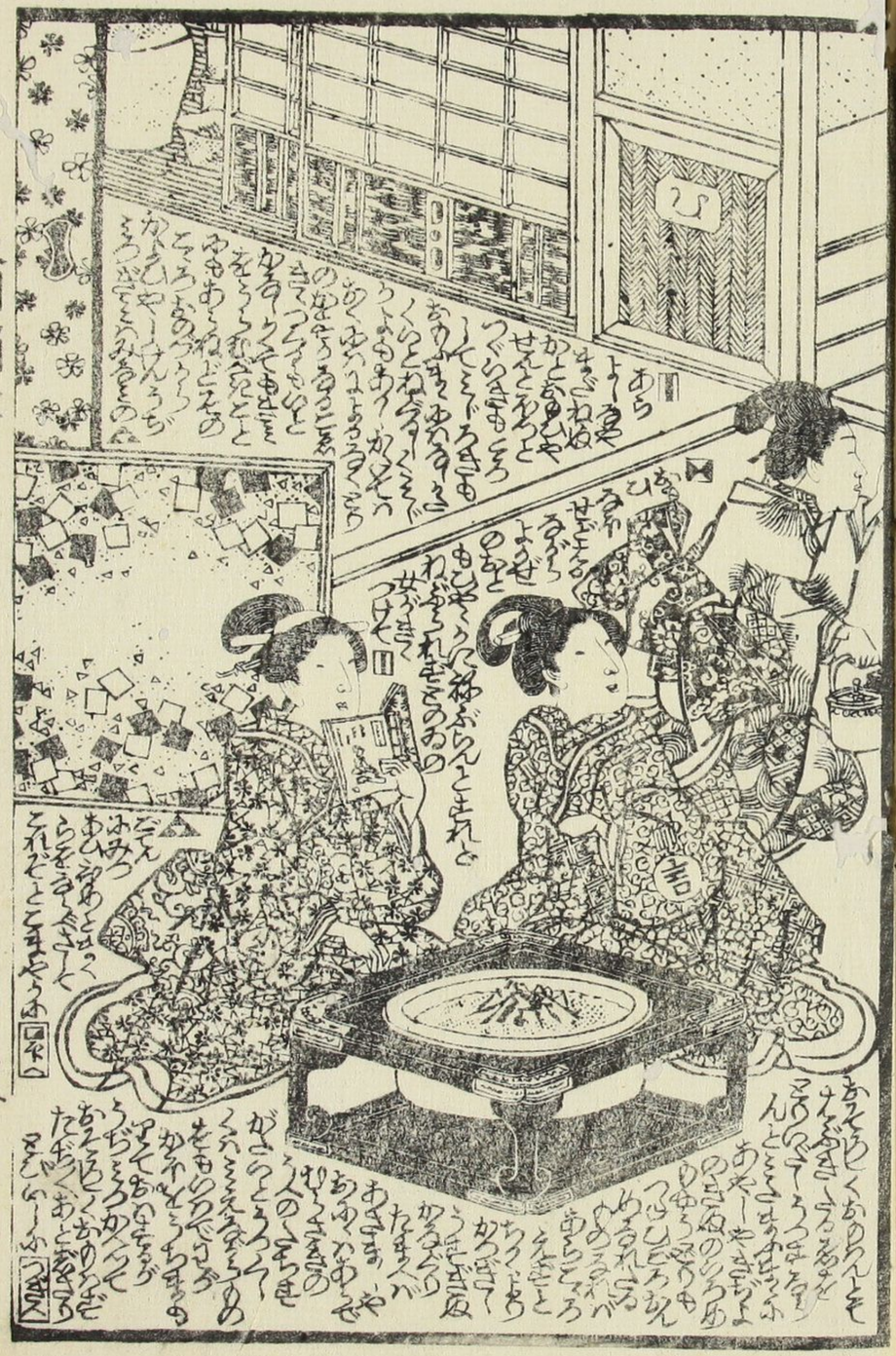
豐國画

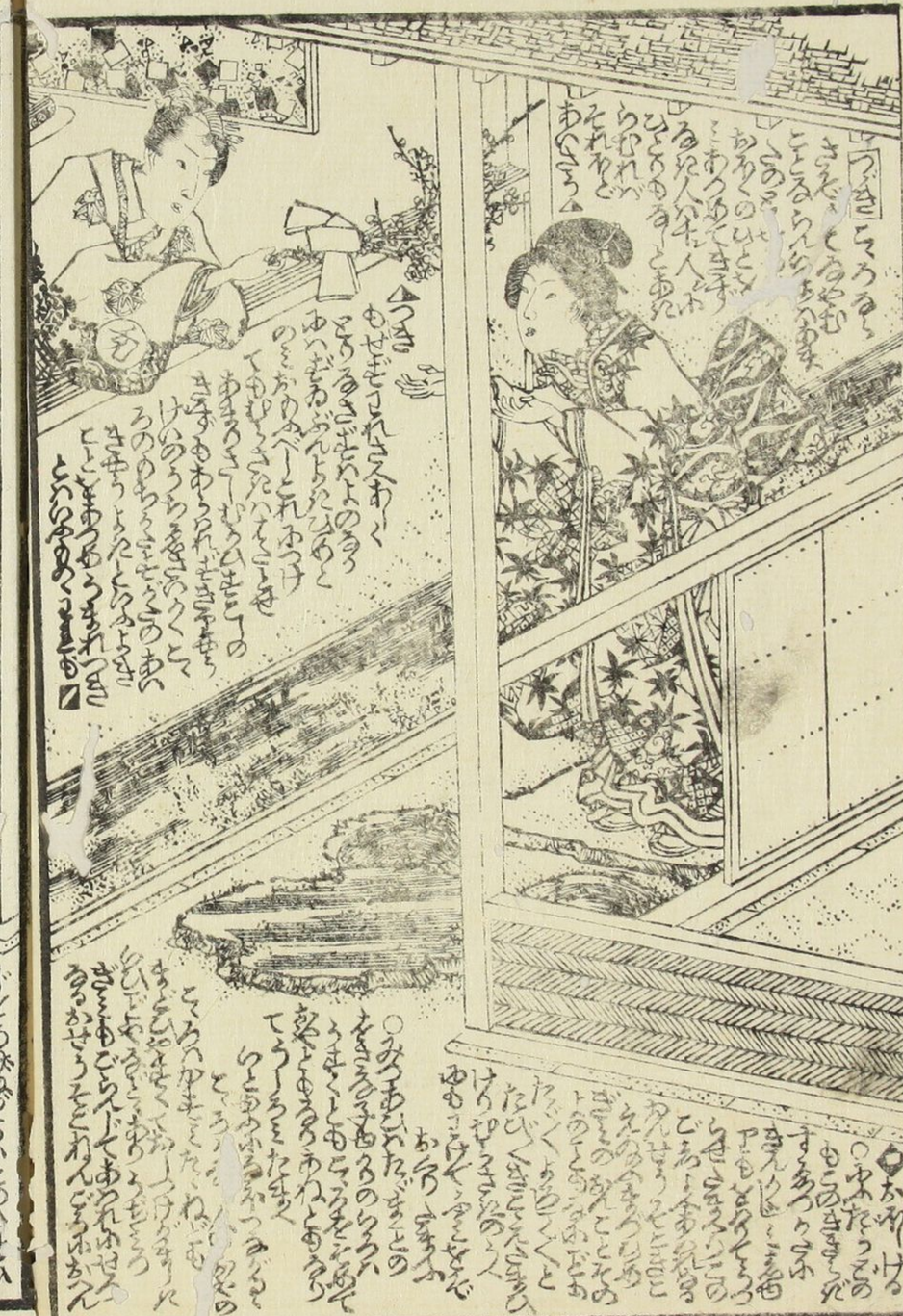
太田屋版

明治文庫

上編 下

村


吉



つゞき

ゆでてふぶやうとうごせんさまへ
ありやうなるあれたまもやうゆこををわらぐ
ひとのくらうもわひやうもとろゆこをあぬも
うまのおやうゆたてこりうるこうへ
のみさをあせんさとうくこのへぞと
まもつろけれどこのどろのあの
まぐちまつたこうこんせくも
こうのあこふうりそそて
あくさもこやくくひと
ゆもやのひけがてこ
これこうひとのあん
せうふたひてびちと
せうくめさめもう
りうるふもなりのもの
あまふるうあうけ
まるとうくこびもさと
いどこのうくうまとれあを
つたうらくとあうりうくん
あーやうとあさのこまう
しこ休きうさあもうくはも
どせんけまがこもとも
まともあせんのたあふこを
ふうたまでとこてのこや
づくそれも共のことうれである
あをとそもあんうこそるうの
どうせてこれたまうくびこれ
くふうりうりをひすぶともて
ろうどせんへどれうこうこうこと
さまのどあんせうあくこて

まうまふあくうま
せうおゆーうまれて
ひさうませトうこ
どうがうふこけれべ
ゆだうどのも
うちうひき
「紙ぶくの
ちのふき
のうとも
こうれど
こうへ
とたえ
えんぐこ
せて
のちへ

てうをちう
さあうどううれ
ゆたすりどうをられ
つびとのさぶたけ
ふあうぶつまとさるの
あさこんであらん一年
るう二年るうりうく
かれがやう。こうこさあ
ちあうけるをとも
かはあとそこうこふさるもうみ
そちたちでふあるまのがのまへ
せうのあのうこゆもけこーのかこ
のせすのの平仲ふうふをまうせーが
ひとこびやまて五七日さーふたうらを

なるほどとうなをとうろがりこうれをこ
ここそーめうるれとうらこのあまこ
やまあまにるりのちへいちもうぐのこ
こけをさのてうやこととともあり
けーしのゆまよのあるさであ
ゆもさやうの女のことをくこ
ろうあまさーとそ
それとうたくこびこまでも
かこそうことうあまさこんあし
「あうあうありくさのうこ
こもこてゆもまうーこて
まうるりーこうこて
とのうりでうあ
ら是ーすきのもうこて
あうやあのちかこ
そう「これのあうこう
こうでーあうそーそ
こちうたここびうろうの
こうとこそもうんあのこ
いかこうもこうせんりや
さうこうかあこと一体
のう老師ーりあのしーか
まうもあーこうこそろそのの
ゆこそとかうこうこやこうり
このあまをうれてこうこうゆ
よくあちうこのてれこうこうこど
たこぬこうこうをあるこうこち
あうりかこもをかくこ

新刻
校正
御江戸昌平町鑑
栄字細註横本
半紙摺薄用摺
全二冊出版

嘉永五年新彫

教訓浮世めぐ私　全三冊　万亭應賀作　溪齋英泉画
兩筋戀ぢ山道　全二冊　万亭應賀作　一勇齋國芳画
亀鑑浦嶋草紙　初編　笠亭仙果校合　柳齋琴繁作　錦朝楼芳虎画

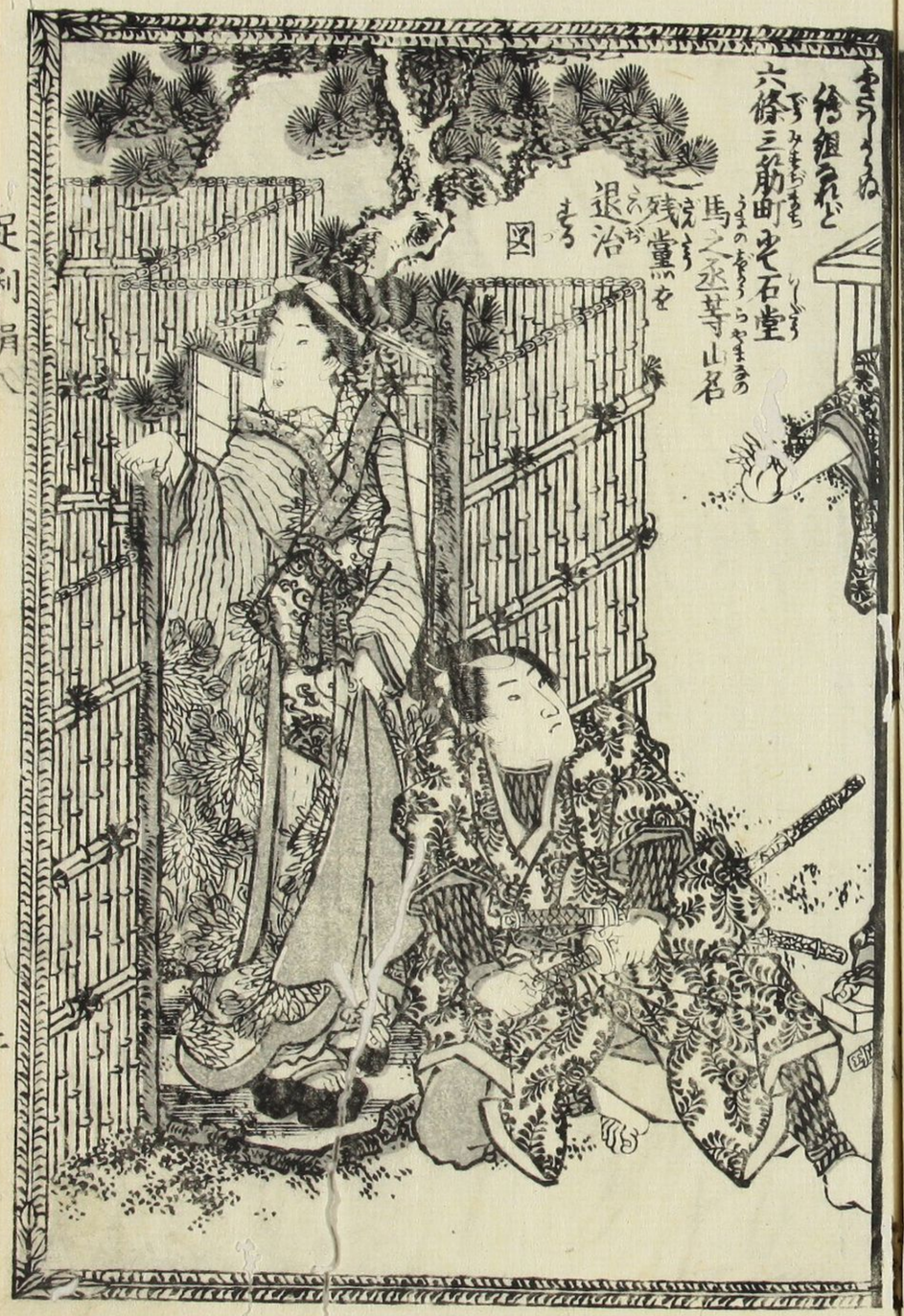
刊行書肆　東都　錦林堂

画や彫物の竜の威勢がよいとう挙騒るとう愛嬌ぎれど真竜が出ていたまくに鯨波も矢叫も講釈場でこそあろ〳〵聴るれ源氏も本のを見時い會得さ所が世界が別て衣冠束帯緋袴歌骨牌をひろげて接ふ誰とても知已ふせん義大夫や新内へ出る近付るけれが若菜の巻ふも若草や猪之助の話もきうまそれでいもうねど今世いあしく洒落く手拭も有職紋さら名物裂手看板書も上代様外題のつぶ〳〵も陸奥紙壷の碑書尽せる趣向と変て足利絹ふ五衣を縫立〳〵似て非る柏ば流行ると見さ先師の案ドの的ふ外まで桂樹が射さ楊弓の扇ふ秋の風たゝぎ画ける藤の花房の長く栄えて紫の色の由縁のやつられも華を接穂の芽生〳〵の作者師匠同援ふ取ふ文此編も朧月夜の面影だろうでさえぬがち唯おもゞきの氏光が髪の毛さきの割てできるくても知まるを一ツのこゝろえふ皆さまふ後と希ふふるむ

辛亥孟春

笠亭仙果

はまぐりの
江戸屋


絵組えれど
六條三筋町 光石堂
馬之丞芽山名
残黨を
退治
図

野

つぎ　うちこけーむすーだ色とまくらんわいろまあつのちのひらを
まるひとつそやまをまそかうろぬ目のるをかるあるぞらを落ぐ
ゆのそちろれが千わくのるーんぐるーとをれ
れどもさぐおろれぬまるび
まそわるーくりーしせんか
らをけとりふことあれば
つぶがりく
びとるびでも
きぐふあろう
さ及人
かくり。

○ちくるとみ、とうくせてあのてくるゆい
まぐまるわぐうぐやトられてかるこ、
「ひろーのとこいちんぐ出せまたぐ」ぬでん
やこのをこのちつまてーどもがあそをく
ぐもされちひとちもかつ。ゆうまこも
それいかとけこるいまつてんろうぐを
ところつひかうともりんてーかて
まこおみちびきまろーくこところが
ついちやっとのごやうちが
「できまいでさぬでそちらまで
ちてわ　ちこいるくいろやろ
ともいそのけうまろーけいわまろ
きそわーあどんいせひもろーうら
りんわけさせまつてみよみちびき
まさらこのやうみのぞこでもかるく
てやるのやとりるきちかつ。きのおろりゆ
そちをこのぢいがトてとまりたまあい
めるわーくりとけーかるぬん
たりれかろぐまくこゆくけれど
まこれーひとのまることいあーき
こともよくこえてさらやろ。きく
おりのれをあるーくいこの氏みつ
ぎこのあかこちふつえぐえんをろかう
うれーからんとういきふきてーそれより
もひゆくないまこりのあんよそ
ひこさりとものをやこちあいの
ゆてひゆるこのちこいるくこも
るきこのまこどかこんるてーの





あーいあるらんとあのふふたが
ひてうくとちつけごとを
のこまくあもやきーそこ
てあいきそうこれ
人のあやめをきろい
こををきれとも
あ結んとあとくそま
わりこらふかろ
あるたてまろ
られぬあんひき
あいのたろ
ければ
つぎへ

桂
葉

野


芝

新刻
校正 御江戸昌平町鑑 宋字細註横本 全二冊出版
半紙摺薄用摺

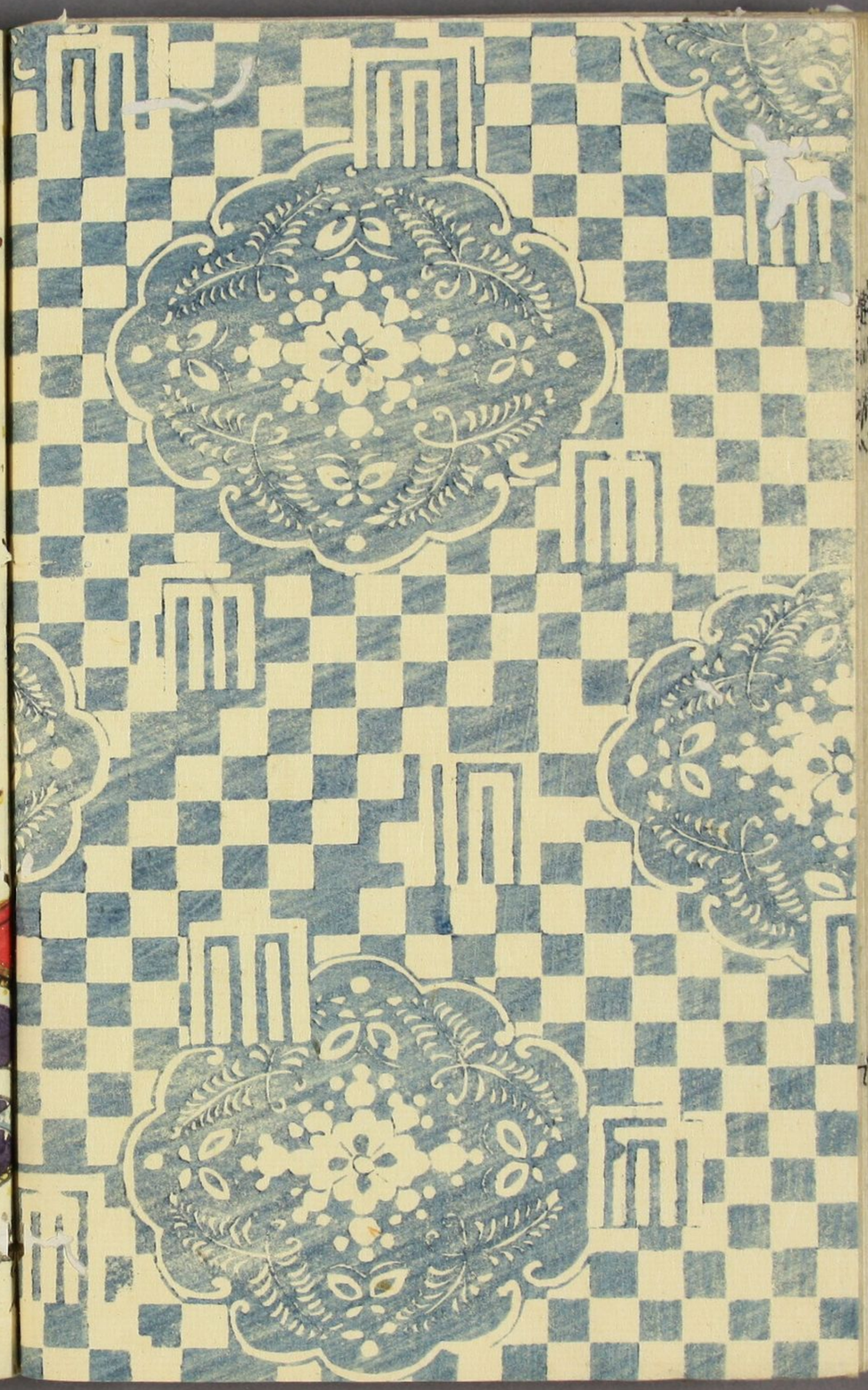
嘉永五年新彫

教訓浮世めがね 全三冊 万亭應賀作 溪齋英泉画

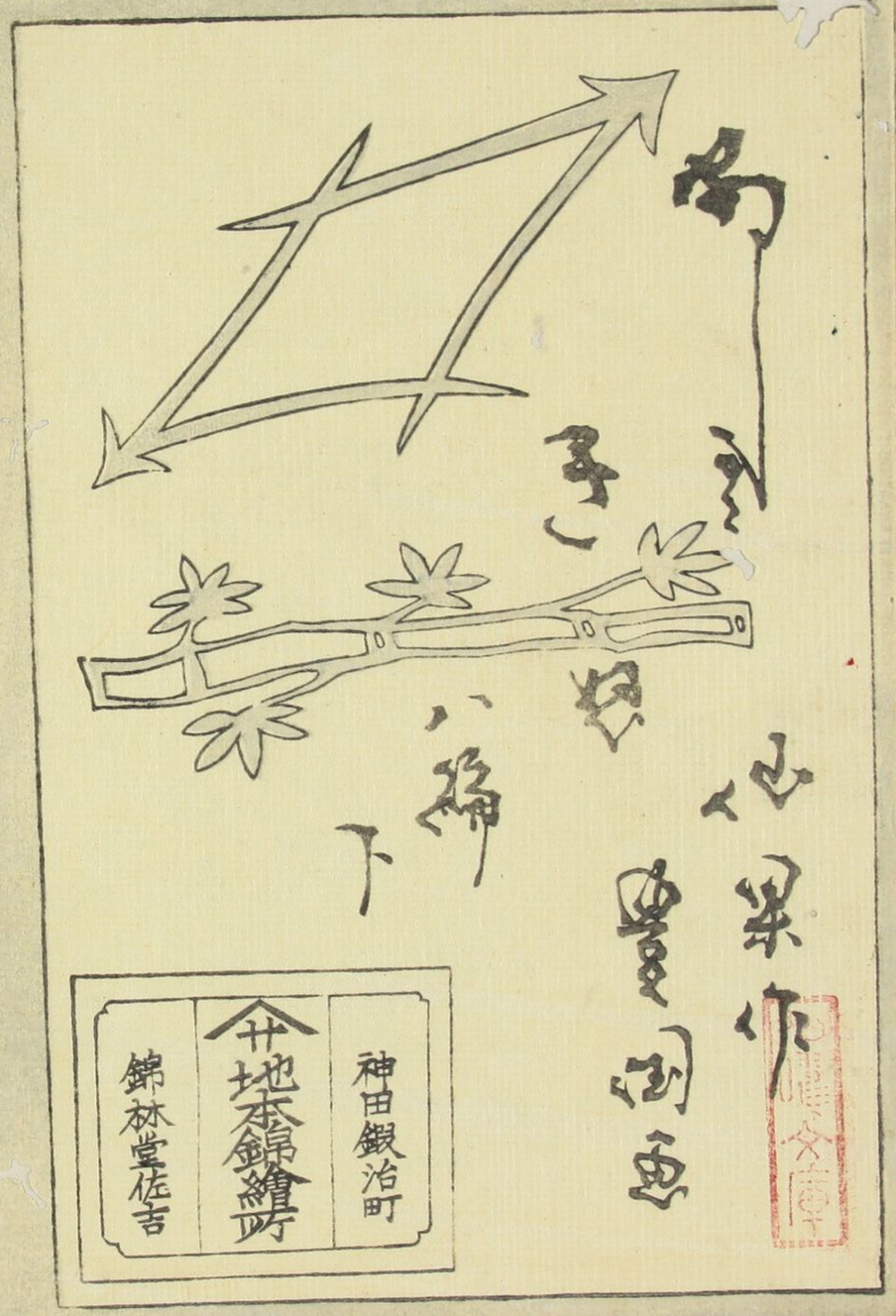
兩筋戀ち山道 全二冊 万亭應賀作 一勇齋國芳画

亀鑑浦嶋草紙 初編 笠亭仙果校合 柳齋琴繁作 錦朝楼芳虎画

刊行書肆 東都 錦林堂



つぎのあらすじ



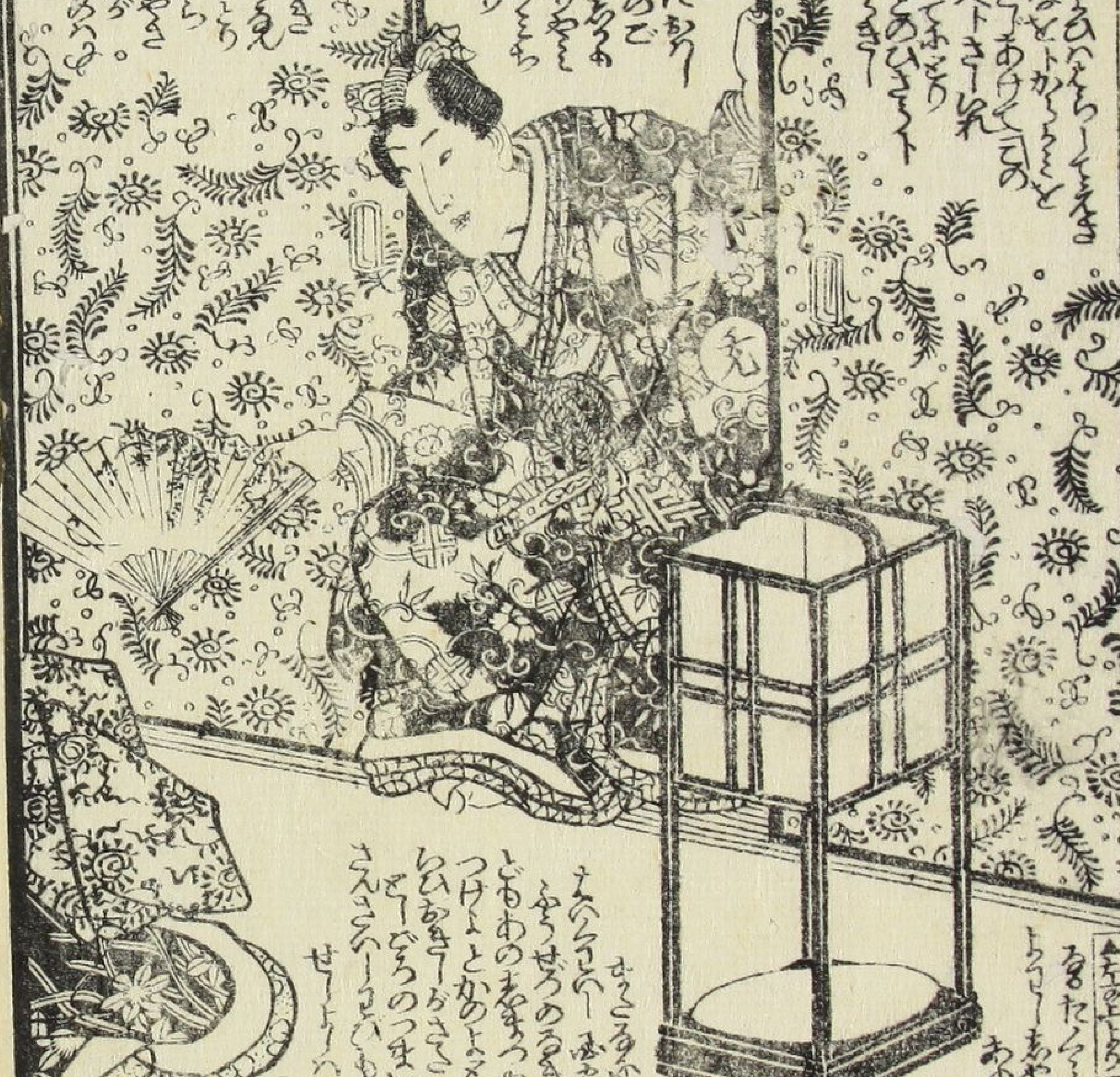
南
手
八
下
神田銀治町
地本錦繪
錦林堂佐吉

野
元

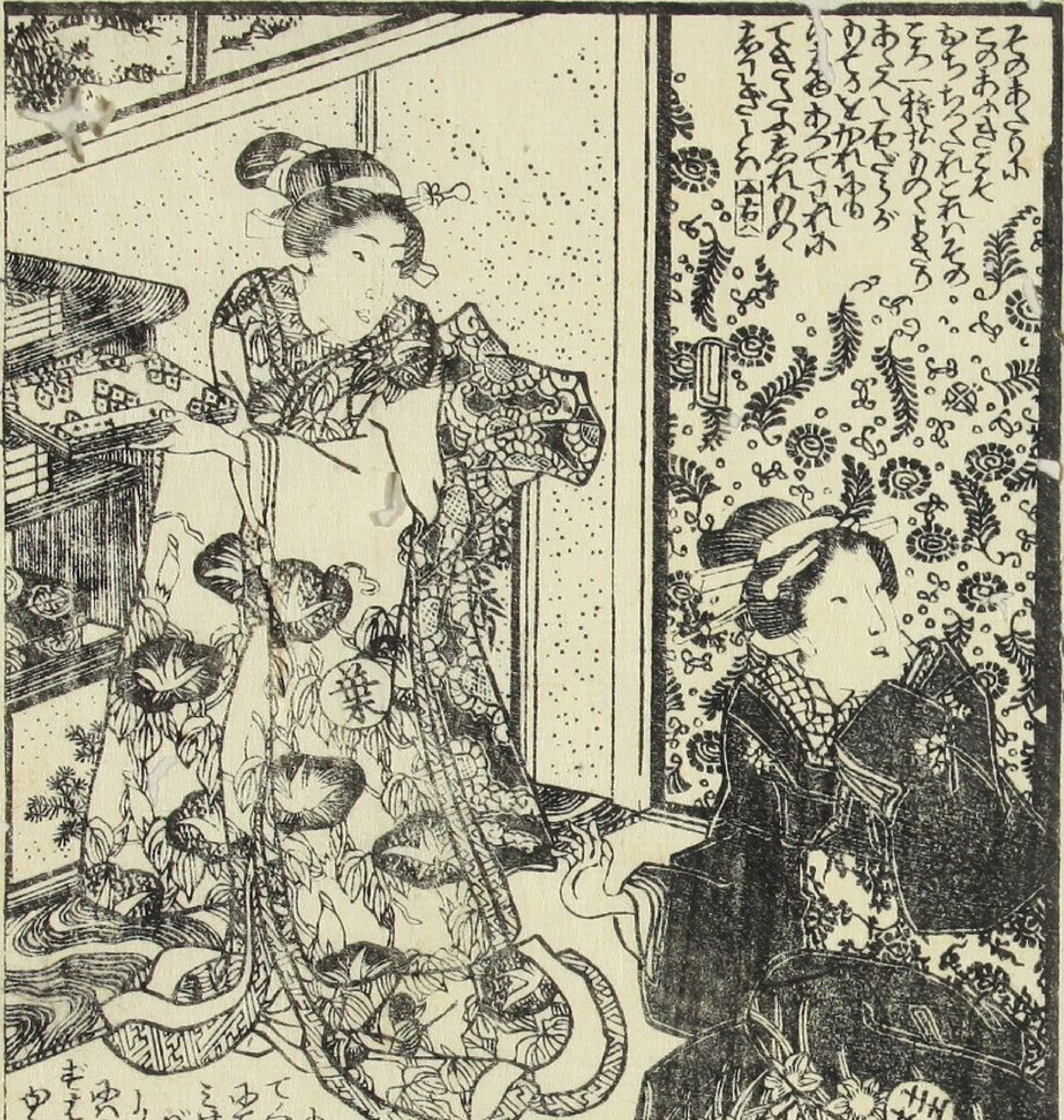
〔つゞき〕りよりわめこゑのへちらしてうきまもをべーりごンとつきあるをとかくわさこのうるりのくてちあけてこのあふぎとこゝろすてへトきーりれたまへとかくるきてふこうこえしろむーとうとあひさこてあふぎとこゝもかすひきーーすすまぞうして

あるさえこのあへぎろ「てはりくうへこそその君まちでひがし山にありーさらしあふぎこので　びやきうかびひあろそのよいかもあらりやとりりるよりふかけいこやもかうじみのもりのおこりのりのめのめでもそ

いらはーそやこれなんぶろのかごわあくゆくらぐさりさをよれげやくるえかちらんとかくさてさうりこもふすまされてからのりめのあやふきやさきとのれーらさぶさせそれどみせのみへくえやみげらせて



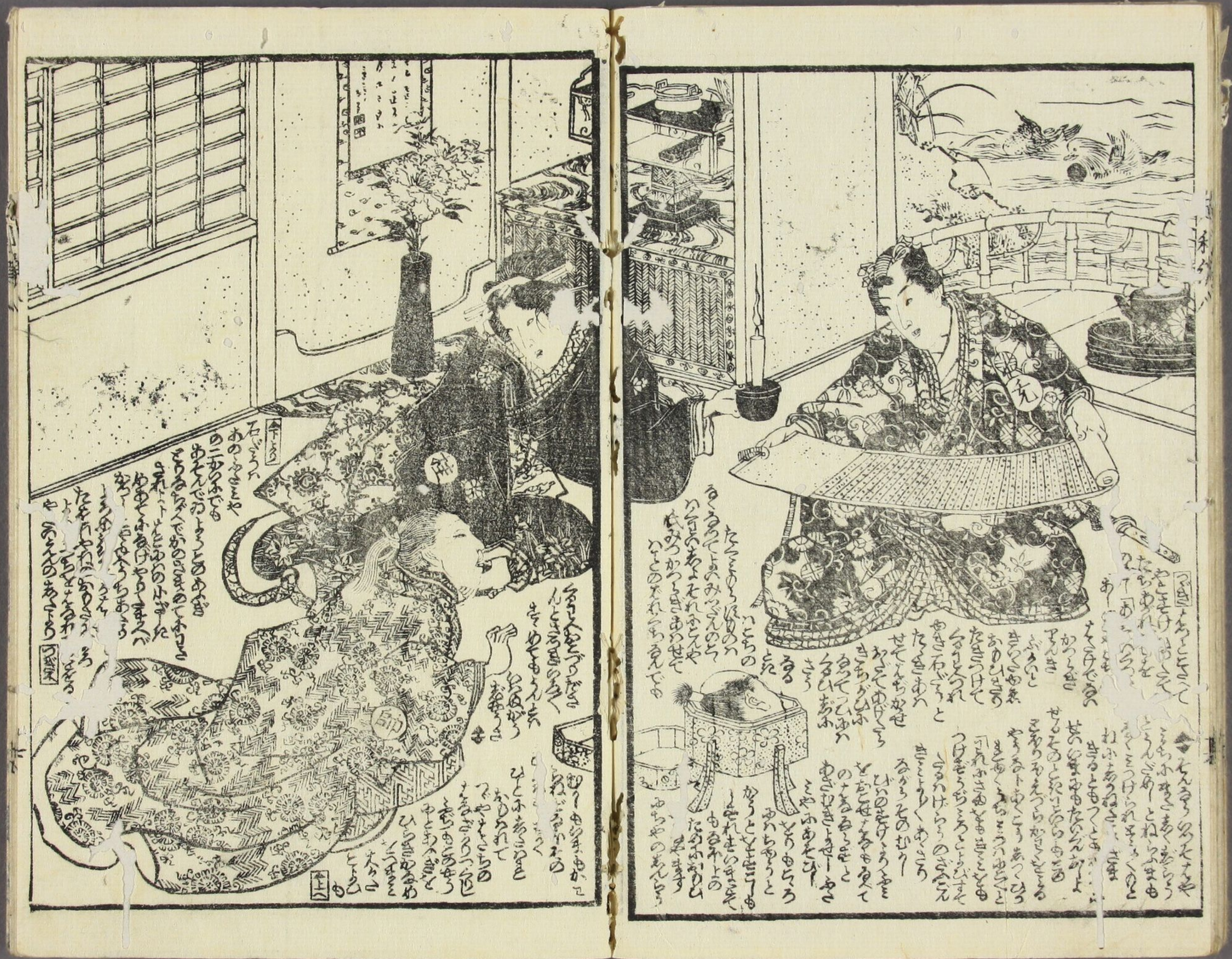
〔さて又上とろう〕いくまちくあゆくあさごころるたくくとのいゆんせへとそのかりをようやーあやアるふざかまいにざさんあふぎをそばよくふそられーよしこれかおうられバなぞうめさとこそめんあうくあるべけれはすゝさゝるてとあおいじともきこえてめーろべわかふずこの〔いびゆうこいかもこれらんかとこものかきそのいくふちとのーさらふ八ゆもあうらせれどもとろへおくこえふとるくよくろいねりのどもまへりとのーゆふかかくどうかふぶみんどいふふうせのるみてふおらわかざさてらるれどもわのまうつぐえんへたいくさきてゐろをつけよとかのとのともはつれるのゆへらいあるーおさてこゆきくゑたでれぞうらぞーどろのつまをさかさてへかーーるときいさんさえ一ろもくもせざわすれふるかんとせーよーい八ゆきさげの段ちがしそのえんよりももつてく入きくそれはあふぎとしすさらふえてふ初てゐくせーよりてとおそいじさきてはつけらくかゆひおへまでるとでるへゆるあるれてそのさうよー



そのあくるりふこのあふぎこそあちらちくれこれいれそのころ一揆のめのくとようあえし石ぐころがめそうとかれゆりいえあうつてつれはてさこよあれのくあうぎとれ〔右へ〕

きのよものみのまへこゝろぞそのさがつれなるまのへひーよあころよりさそてこそといふくてづるとえうるふゆきれべるえそのぶんるもたゞーたくてこのまのびてきるうじおあふぎとのよのふんおつものかものやこさをけとやらんがまつきござうのかのへやぞらうけーもかれうるぞともつとのものつけれとのきとちんきらるとえらえそれらのきこえことみるあれしそのとのたちとも合れらん中のめてよりつれそおいせえと絹らあへおよそあつさえさぐらあのすうぐえはまのびおしりとのらへてぞそてえどのくろうえなるりがまあすとひのめのゐらんさうそくひろへのひとをあしらふもやぞてらうちいおとしおひ中ーがてらかりをてーさものものらでのえやてへのてらげてけざいふうそうあへるそよびのれこけえとあひつの古絵だとのろーーたまえこれをうへゆもきのねひきてこれをしーきゝやとまけしけざうらうきそこうゆへさえ八ふひきにそきる〔ぞてよのはたがのまえことのものたゝへのりてーゆげゆくをとやかゝりかゝめあさきひとこ〔つぎへ〕

桂
惟
野
良



# 豊國画

仙果作

浄書
金川

# 嘉永五壬子年新刊

## 足利絹手染紫

笠亭仙果作
一陽齋豊國画

○十編より十四編まで当子春發兒若菜の上第十二編まで
全くそろい十三編より同下いまゝ
うつあひ姫柏之助恋愛の
うえ人情の極致をかきあらはせ。この芝居は
おもしろき草紙大当れの

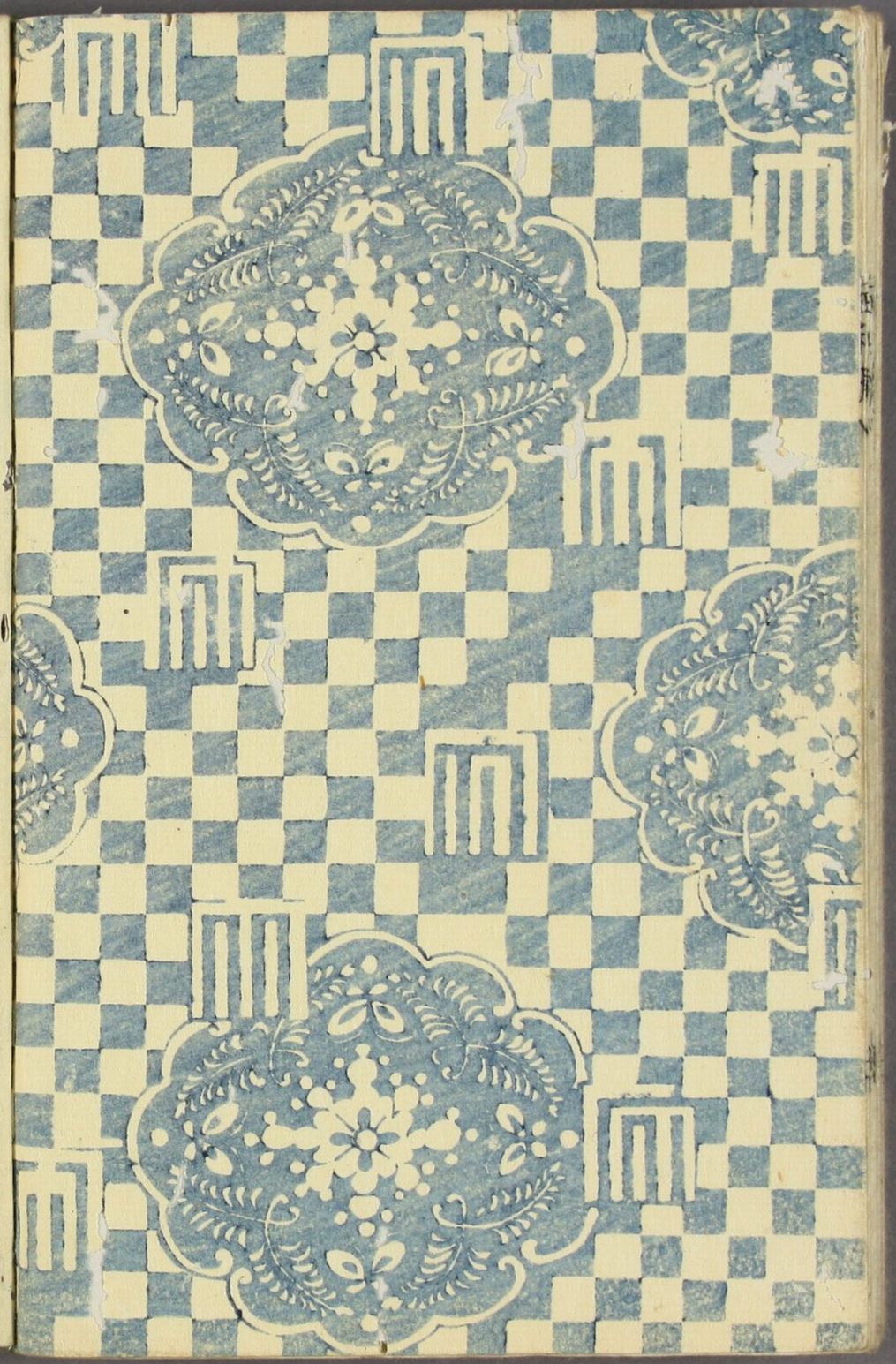
極彩色
## たのかぎぬ染上り大雙六

袋入一枚摺

これもむかしそのゆうれい芳藤画にて御連仕はは評判よろく
やはりゆうれいあるがごとき奇妙

## 東山奇談 娚娜櫻

種吉作
芳房画

右物語の世界を移延引仕は尚まさ
おそくも美出しやはい

東都神田鍛冶町二丁目
太田屋佐吉謹白